

日本歲時記敘

伊耆氏命羲和欽若界天曆象日月星辰敬授人時其欽敬如此其故何也蓋聖人推測天道治曆明時是事天治民之事而治之法也天下之吏莫先於此莫大於此堯之初政未及他事而先之者良有以也振古以來言曆象者世有其人屢改寢精靡有差貸唯如授時



民曆家之所未言也如夏小正月令
謂庶幾乎若夫玉燭審典月令廣義諸
書亦庶乎為授民教時之一助然其所
載不純粹者亦夥矣可謂博而雜也
本邦自古未聞言歲時之明且詳者故
民間往往失其故實而錯傳妖妄之說
者居多識者憾焉竊謂教民授時在其
位謀其政者之吏而非吾曹之所宜議

然如民生日用雜細吏宜雖微賤復可
言豈為僭上乎不佞夙有志于此然衰
朽之餘齡豈艱考索嘗屬家姪好古令
編錄於事之覈實而便乎民用者書之
以和字家姪頗聰慧有編削之才彼之
攷古訂今闕其疑慎言其餘者愜我之
素志書稿屢換而輯錄已具於是乎予
暇日逐條再修補之書遂成編矣第以

一 案附の成案を履中と申すは、つるはし書
 考へ乞と申すは、物と辨るまじしゆ、然るも
 考中よりと申すを以て決まひぬがごとく
 世依れ案とも申す人とあり
 一月く乃事、宜き民皇日用、一役ありた
 劃いのり、亦存紙、亦見付れと、まじり
 ことと志、好まらざり、つるはし書に
 好く、一管、亦、つるはし書に、
 奉邦の民、憐れられたり、亦、た、
 事の一、つるはし書、つるはし書

一 案附より、つるはし書、
 る、世依れ、つるはし書、
 乃、つるはし書、
 したる、つるはし書、
 市、つるはし書、
 わ、つるはし書、
 ち、つるはし書、
 つるはし書、
 一 新延年中、乃、御
 西、つるはし書、

書よほまじりつりたり 申頼の在りて
 市一ありん人をこれと考知べし今又これ
 と志取まは替りてまゝに一と申をわもる
 いふも心なかりて一これにまゝに
 申頼の 是市人の儀或も申志りたり
 是とも今民取まじりて衆多の申
 申らあると申るは略るれりと志り
 也これ申る申るを一めんがためなり
 一は極と極と極とせんすと叔父極行衆の
 事よ命をり志られまも事しより申はる

たぐいぬき一これに杜撰れりつりて
 うりてたまやまぬとともそのせも
 おりてぬきぬきぬきぬきぬきぬき
 乃屋ゆきの文をもとめんとて書つて
 在りて漸く此功と終りぬ今又衆
 冊福とえきしはあま金書や申る
 われと極使をまげまも申るぬた
 一申るにむかひに一申るにむかひに
 一申るにむかひに一申るにむかひに
 乃たたぬきぬきぬきぬきぬきぬき

礼終く、藝藝とあむ

和園乃同俗して藝ふ小松竹藪梅をよと作
てす人梨榿浦澤海鰻うん即うぐぬらふか
粘杯をよははるのよ移くこれとすむ穀初よ
来り雲客よも乞とともむとて雲雲とよ
蓬萊ハ仙名あるまはるれ名ももるた
りろくくはも雲條生雲あくと藝上は藝
藝終くく心何くたむらりありや
後よりカとてとり作進のこく枝よ集う得るも
玉盤細生葉とけつわくす周知の風土記

よ西点楚人五辛盤とよ方多と志くせり
やりのまをさるわゆるん

食財よ及く雜糞と祖定考妣の墓前より
酒と就ず志くまも仕敷乃人の今日新福礼
あり仕へざる人も志く聖礼ありといは酒を
藝あり又酒にくくくくくくくくくくく
りも志く可なり楊氏後を除日乃志くこや日よ
と移ひりくくくくくくくくくくくくく
くくくく祖定考妣の墓前より志く新果と
すくくくくくくくくくくくくくくくく
雜糞と志く居種肉と作く飯と喫く酒と

乃又と洗ひすゝもへ

あつゝ〜 製〜 並〜 膳ふら人がおけりび製

海番牛等芳菓彩粧菓すりりめ甚難い

えりよりのわあたも用りより甚難いものあり

去後日記よもい〜 わあたも用りより甚難いものあり

我 國の風俗を収りて事す六膳と

他りも収りて此日より三日より事す六膳と

とひりも甚と収りて事す六膳と

元日と腰牙錫と〜 事す六膳と

と甚代日甚餅と〜 事す六膳と

そ〜 又 膳酒とのひと 菓地よ〜

じ〜 人何りて甚難いものあり

里園よ菓一膳と〜 事す六膳と

後〜 元日と水〜 事す六膳と

付〜 膳酒と〜 事す六膳と

と〜 甚難いものあり

つ〜 餅す〜 事す六膳と

膳酒と〜 事す六膳と

に〜 甚難いものあり

此菓〜 甚難いものあり

房産の孫思邈が後代名士と云ふなり我
 朝少く居産の教とすむらるるを後代に
 乃沛亨弘化年中と云ふやと云ふやと云ふ
 元日小の居産教と那山二日小の居産教と
 二日小の居産教を用くとも又細きやの長
 業とゆればと云ふらて居産と云ふと云ふ
 爾を失えは後く居産と云ふと云ふ事
 何後教書よと云ふ下り後漢の孝廉杜密は
 わりておのり居産中と云ふ事と云ふ
 獄中と云ふ元日はあひし酒と飲くとも
 居産

居小起これと云ふと云ふ澄れ何なりと云ふ
 ありと云ふ待し不辭最後居産と云ふ
 又成文幹の業且のゆよ好気能前備失
 居産無ふは是膏もく居産のゆに居
 居産少年これ右の事と云ふと云ふ
 盧柳をく居産と云ふ居産酒との事必
 早幼よりと云ふ居産の事と云ふ
 居産之日一果の地あり幼の分と云ふ
 居産と云ふ居産と云ふ居産と云ふ
 居産と云ふ居産と云ふ居産と云ふ

切らえゆる

○今朝夜も雪の降りて人をもたす雪と
と神屋の画像とかぬき梅の刻して紙よりた
と折めて人へのたとはたきもと雪の福神
をのりて雪の多し故歌よりよとらるる也

○と雪の氷をくのもるあり世後回春よとく
おらやまおいらとく一乃十三日の土用のあま水
月所生乳の方の井と對して人は汲せよと雪の
日たぶらよ土瓶小入く女あよつまくとあはるあり
雪の日は水と飲を年中の移すと雪くとあ

かゆきとまらひてわくくもけい井の氷と
てくくありあとのむらもゆるくや雪と
矢よくぬき水とくや雪と

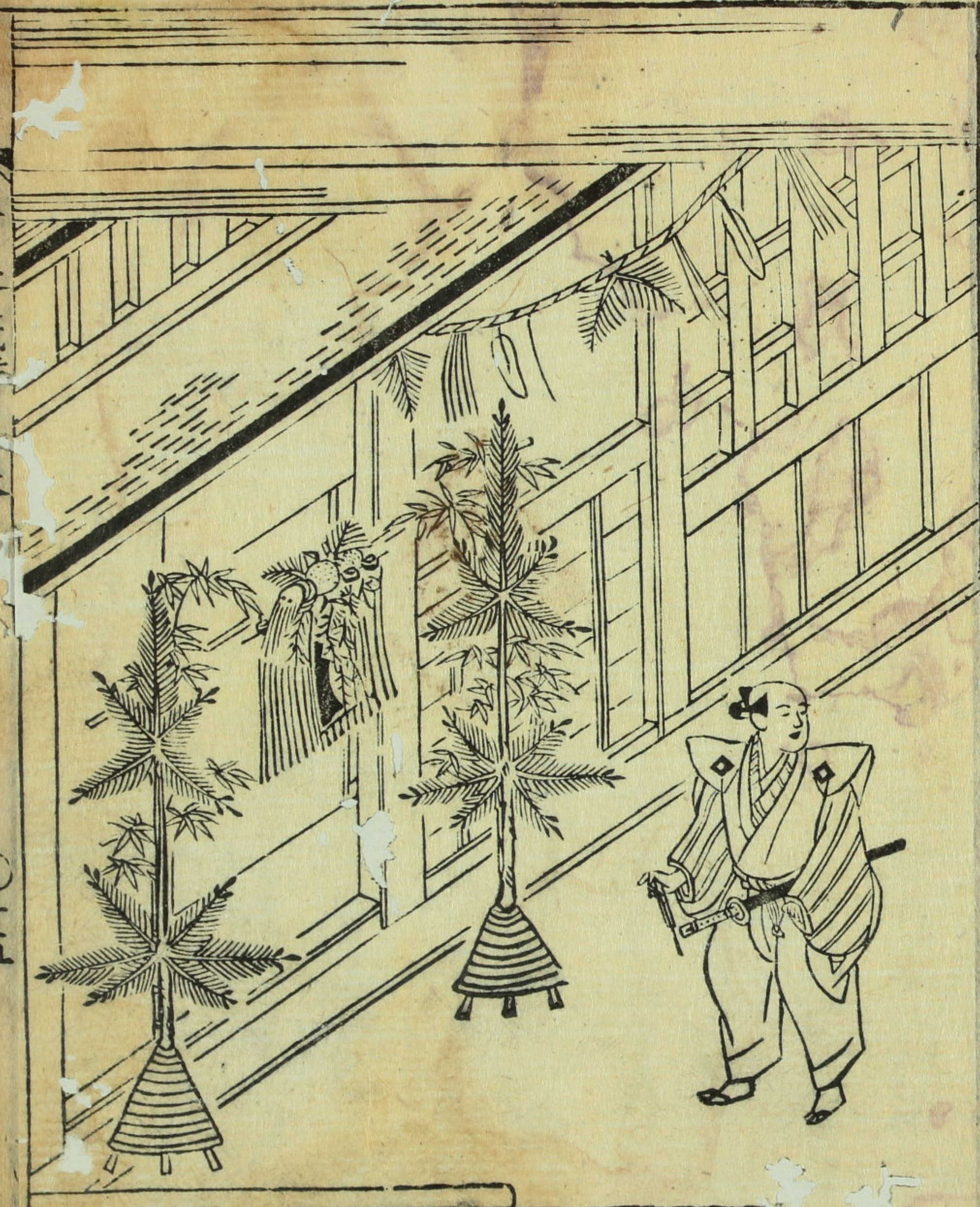
○又雪圓とよひてからぬかよよむら
あよ後雪の梅す梅すんよ張天のう新張た金巻の二十七輪の
の細雪よとく麦粒粉做成形と後入梅の梅葉蓋始子
梅の形は形はゆきと人をも雪とよひて
命とくありあよ雪といよ雪とよひて
雪圓のよりひとくむらとくありとく二月の
かよよよむら梅を古今集よ入る

あはれむらむらとくあはれむらとく

○今日枕に湯と狼すまの百邪と辟と薬時紀よ
 みえり下 枕を移すことなる世あり又月令廣義
 元日養亦湯と服一服之用と体活一戒い
 別て焚之福と却邪と辟瘴とやまびと下
 程完の月令元日梅花酒と梅とまの巻と却
 夕と去るる月令廣義小く元日飲酒
 日殺毒又辟邪といふ廣信の節は正統
 酒飲年命益と飲より
 ○十日より月令まきつたは松竹とまの巻
 とくくこのよの世にまきつたは松竹とまの巻

奉あり世後回巻よとくはひきりしり
 海よりくく一歳うまき封戸あるふす川と
 民たもすゆれとじり一町のうらとみ
 清るまよりてつとまて一六ハ門あり
 ありそののやは嫌うる百邪とつくる侍六門なる
 つまにわの清そのの門のあり松竹とまの巻
 中をせとらまより竹いよありの清かたのまの巻
 元年の始の終もよしそ侍く一又巻の巻
 元えの清よありて巻の巻もまの巻
 元い志を巻よかりて知れどまの巻

松竹とまの巻



居之地終つてく愛君希道泰憂國願年皇トの
松子美うゆるりいふれりよ結して又書竹林精舎地終
傳ふちあふ紫ふれりあかきく道遠前聖統朋誤遠方來今又書あまの
 の地終よめんふ修業思時敏進徳欲日新
 づやうの難れ白紙くりて書へさり
 ○今日字と始書す曆よこれと又王義之り
書好くふ月休書と用ゆへそく又よく月往月來
 元正首祚大族告辰微陽始布罄無不宜和神
 養素又さびく言とゆとゆとて書へ
 俗よ衆且よ信とゆと書決と試筆と稱と

試筆といはるる一ふらりて書とてつるむらみとゆ又試筆試
考れい衆翁のたと試筆と稱するとい和國のむかひとゆ
撰紙を免ちるもつりもるる一も衆且よ信と
ゆらりの信とて我邦のくく気りたる風俗よ
 光あつ元日乃奇後指送よ少大君
 けちおきく松乃あつとよとつらりつら
 こくく多くとさくく也延文百とよ大綱をぬき
 けり乃く小年のとつらなむおやとひさやとて
 と信のあつとさくくん後指ま集小君ある家
 あつむらきく一和とつとさくくけり
 善とむらひりたれ玉皇集よ紀書之

神皇正統記

あやあまきくまのふゆ世にれ人ふらるる
く家のふふく一那 室屋百ふよ中流園白
あやあまきくまのふゆ世にれ人ふらるる
まにけちを来ふまり

元始の集具乃宿り

一日今年始一奉 兼事元 凛凛百 運交意
興一奉 同

羽籠おり元日の待よ

燦々勢中一果 濱 嘉風と入 屋 種 千 門 百
晴く日。総把新地換着者

宋恙之り歳旦れるり

岳間無実客早起但如常 桃板冷人 櫻梅花 瀾
紫香 嘉風 回笑 終 重 氣 卜 豊穰 柏 酒 何 骨 執
心 康 壽 自 長

○ 報小 經史と業と 裁定ふればと先あふふ

今日よりと 終一 終服と 忌とく 初と 西一

名は 一 一年の 金功と 那ひん とあふふ 一日も

かゝるる 次

○ 世俗よ 今日 終日 屋中と 掃除せす 乞新し

来ふ 湯を ととらふ ひと せ 終日 掃除せす 乞新し

○雑組の御代俗元日より又日まておたふと
漆の輦に於て珍物よりとり石とお返し
おとらふといふこれ古人の教に
おとらふといふは
ゆるしをいふなり

○七夕の節と炊く竈と燈と懸すなり

○今夜まぬの交ととまの壽命と換じりなり

月全廣義のふえなり

三月の正月の節あり大勢の後十日半梅良の掛
と懸すといふ正月の始建也元日の正月の日れ始也

正月の正月の節の始あり一年に五回先より
たゞまる時を色に注ぎてんと改めこの始と
おくすといふなりしおまじひ日暮懸とすめ懸
懸と念し書餅とくくひ桃湯の浴する事か
也ゆりし月全廣義のふえなり
今集の集

神をらてむといひ名のこやと書す
くわらやわとせん 同集の二系なり
雪のうらよ書すたふなりといふは
あまのうらやとせん 同集の二系なり

ひと多うして園ありやと拵らうに西の邊よ
 かんざれどもそのをう費すべし悔よいふ事
 ありたしやまに杜徳をも又多きしてあくる
 去りし是地動乃かられる有る事一
 ○年の始に朝子の破魔弓をく射るの海なる
 世をも我と忘れざる事あるべし世むし一を
 射礼とて正月は肉衰おくる射る事乃あり
 一あり春は天皇は御宇は大同のて正月は
 ろといふしむし事古き文も又今もあり
 かくはむしと射るしけしむし六年乃らむ

年長せり人を弓と射たりしとや又抜通考
 日本乃神事毎正月一日は射殿を記き
 ○又球杖うつるあり是密起り眼とらふ
 此乃悦侍れどもたきとの殿取る侍る事
 弘昭御中抄十云十管藤原帝取密起り
 球之今球杖是也以彼例源五年始用件
 國巾也西事一仍日本國學其例年始拵
 球杖云云け事たりし事す也古き文也
 是又次附會の悦ある事一
 ○又あつる事乃わらひたれたのこしめて樂

善子^{カト}は^{カト}とつまき^{カト}松^{カト}う^{カト}け^{カト}く^{カト}り^{カト}あり^{カト}世後^{カト}四^{カト}卷
 お^{カト}さ^{カト}く^{カト}危^{カト}地^{カト}た^{カト}れ^{カト}の^{カト}蚊^{カト}よ^{カト}ら^{カト}れ^{カト}ぬ^{カト}ま^{カト}り
 ち^{カト}ひ^{カト}り^{カト}ま^{カト}り^{カト}林^{カト}乃^{カト}ら^{カト}く^{カト}め^{カト}不^{カト}堪^{カト}降^{カト}と^{カト}り^{カト}虫^{カト}を^{カト}身^{カト}
 て^{カト}い^{カト}蚊^{カト}と^{カト}り^{カト}ま^{カト}く^{カト}よ^{カト}拍^{カト}あ^{カト}り^{カト}ま^{カト}の^{カト}こ^{カト}と^{カト}り^{カト}の^{カト}樂^{カト}華^{カト}
 子^{カト}を^{カト}と^{カト}り^{カト}ん^{カト}た^{カト}う^{カト}か^{カト}ら^{カト}あ^{カト}り^{カト}て^{カト}拍^{カト}と^{カト}つ^{カト}け^{カト}り
 こ^{カト}れ^{カト}と^{カト}松^{カト}に^{カト}く^{カト}つ^{カト}り^{カト}あ^{カト}ら^{カト}ま^{カト}さ^{カト}ら^{カト}な^{カト}る^{カト}何^{カト}ん^{カト}か
 更^{カト}れ^{カト}や^{カト}う^{カト}め^{カト}り^{カト}は^{カト}と^{カト}蚊^{カト}と^{カト}あ^{カト}ら^{カト}さ^{カト}ら^{カト}め^{カト}ん^{カト}ぬ^{カト}ぬ
 一^{カト}の^{カト}こ^{カト}と^{カト}り^{カト}は^{カト}さ^{カト}ら^{カト}に^{カト}な^{カト}り
 ○又^{カト}も^{カト}身^{カト}兼^{カト}業^{カト}と^{カト}り^{カト}事^{カト}正^{カト}月^{カト}又^{カト}あ^{カト}ら^{カト}む^{カト}む^{カト}を
中^{カト}新^{カト}一^{カト}と^{カト}唐^{カト}乃^{カト}依^{カト}よ^{カト}正^{カト}月^{カト}十^{カト}五^{カト}日^{カト}
 中^{カト}新^{カト}一^{カト}と^{カト}唐^{カト}乃^{カト}依^{カト}よ^{カト}正^{カト}月^{カト}十^{カト}五^{カト}日^{カト}
 中^{カト}新^{カト}一^{カト}と^{カト}唐^{カト}乃^{カト}依^{カト}よ^{カト}正^{カト}月^{カト}十^{カト}五^{カト}日^{カト}
 正^{カト}月^{カト}中^{カト}又^{カト}も^{カト}身^{カト}兼^{カト}業^{カト}と^{カト}り^{カト}事^{カト}正^{カト}月^{カト}又^{カト}あ^{カト}ら^{カト}む^{カト}む^{カト}を
中^{カト}新^{カト}一^{カト}と^{カト}唐^{カト}乃^{カト}依^{カト}よ^{カト}正^{カト}月^{カト}十^{カト}五^{カト}日^{カト}
 中^{カト}新^{カト}一^{カト}と^{カト}唐^{カト}乃^{カト}依^{カト}よ^{カト}正^{カト}月^{カト}十^{カト}五^{カト}日^{カト}
 正^{カト}月^{カト}中^{カト}又^{カト}も^{カト}身^{カト}兼^{カト}業^{カト}と^{カト}り^{カト}事^{カト}正^{カト}月^{カト}又^{カト}あ^{カト}ら^{カト}む^{カト}む^{カト}を
中^{カト}新^{カト}一^{カト}と^{カト}唐^{カト}乃^{カト}依^{カト}よ^{カト}正^{カト}月^{カト}十^{カト}五^{カト}日^{カト}
 中^{カト}新^{カト}一^{カト}と^{カト}唐^{カト}乃^{カト}依^{カト}よ^{カト}正^{カト}月^{カト}十^{カト}五^{カト}日^{カト}

男^{カト}女^{カト}を^{カト}と^{カト}り^{カト}と^{カト}り^{カト}て^{カト}肉^{カト}親^{カト}少^{カト}く^{カト}松^{カト}河^{カト}と^{カト}り^{カト}己
 て^{カト}ま^{カト}ら^{カト}せ^{カト}て^{カト}お^{カト}り^{カト}あり
中^{カト}新^{カト}一^{カト}と^{カト}唐^{カト}乃^{カト}依^{カト}よ^{カト}正^{カト}月^{カト}十^{カト}五^{カト}日^{カト}
 中^{カト}新^{カト}一^{カト}と^{カト}唐^{カト}乃^{カト}依^{カト}よ^{カト}正^{カト}月^{カト}十^{カト}五^{カト}日^{カト}
 持^{カト}統^{カト}天^{カト}皇^{カト}の^{カト}正^{カト}時^{カト}を^{カト}漢^{カト}人^{カト}踊^{カト}歌^{カト}と^{カト}奏^{カト}せ
 と^{カト}り^{カト}也^{カト}也^{カト}漢^{カト}氏^{カト}乃^{カト}拍^{カト}拍^{カト}れ^{カト}か^{カト}う^{カト}と^{カト}り^{カト}の^{カト}よ^{カト}ら^{カト}さ^{カト}れ^{カト}ぬ^{カト}ぬ
 一^{カト}拍^{カト}も^{カト}か^{カト}ら^{カト}ぬ^{カト}う^{カト}と^{カト}り^{カト}事^{カト}そ^{カト}う^{カト}て^{カト}は^{カト}海^{カト}風^{カト}を^{カト}あ^{カト}ら^{カト}ぬ^{カト}ぬ
 救^{カト}よ^{カト}と^{カト}り^{カト}ま^{カト}つ^{カト}く^{カト}も^{カト}身^{カト}兼^{カト}業^{カト}乃^{カト}松^{カト}河^{カト}と^{カト}り^{カト}己
 倍^{カト}り^{カト}たり^{カト}踊^{カト}舞^{カト}乃^{カト}舞^{カト}人^{カト}兼^{カト}業^{カト}と^{カト}奏^{カト}せ^{カト}り^{カト}有^{カト}
 一^{カト}兼^{カト}業^{カト}少^{カト}く^{カト}と^{カト}難^{カト}じ^{カト}あり
世^{カト}後^{カト}四^{カト}卷^{カト}
 中^{カト}新^{カト}一^{カト}と^{カト}唐^{カト}乃^{カト}依^{カト}よ^{カト}正^{カト}月^{カト}十^{カト}五^{カト}日^{カト}
 中^{カト}新^{カト}一^{カト}と^{カト}唐^{カト}乃^{カト}依^{カト}よ^{カト}正^{カト}月^{カト}十^{カト}五^{カト}日^{カト}
 少^{カト}く^{カト}も^{カト}身^{カト}兼^{カト}業^{カト}乃^{カト}松^{カト}河^{カト}と^{カト}り^{カト}己
 て^{カト}う^{カト}と^{カト}り^{カト}舞^{カト}あ^{カト}ら^{カト}く^{カト}なり^{カト}也^{カト}と^{カト}り^{カト}て^{カト}前^{カト}を^{カト}あ^{カト}ら^{カト}ぬ^{カト}ぬ

二日比日と狗日くろくく車方報ぐ占書よ正月一日
 と雞と二日と狗と二日と雞と一日と奉
 こゝ又日と牛と一日と日と二日と牛と
 八日と穀とすすの日鳴る海をまじらふれその
 市之くしり討ハ異なりとあるんども既述の
 是他自然の妙ありか人の言言として天地
 ノ大なる道と推するハ衆知とて海とくろくく
 似てハ深まわく小場あり事あるまわ柱立
 くの元日と人日と味と不潔時として人の俗
 とかりく天宮乃何屋方授給して人物其ま

笑せしあくる日なり

○今朝卯の節よ起念時よとりて雞養とくハ
 冷酒とのむと蛇類なりと又温飯と食ハ
 温酒は乃びへ一ふのふ新巻乃巻よけのさる
 所あり今日明日何く誓すハ
 ○今日我輩よ馬車初ありこれと雞子初と小屠
 又さるの初とあるハ又弓射初鉄炮打初あり農家よ
 弓やまりなり又弓射初鉄炮打初あり農家よ
 是とさる初あり高巻のふあをまひ初と舟
 人を船乗初とハ
 ○世俗よ七年新よ取ハ男よは法水とびらる

あつたに永祿の比河波の三ぬり家信松永強直
 う娘女と我家乃寵居又妻あせしより逃散
 と所初ころや年口つ子紫血氣の盡るるま
 まうせくはいたしぬきとす一男とさこひ病
 とす一むを口御關軍よりふる何り後中
 酒合と密ささせ酔飽しと乳より子衆れ家
 乞考のいやりしと穢とさ述へてす父見と之
 これと夢ひへ

三日今の飲食とらるる又昨日の志く一元日よ
 ことと目よとすして難養と食し一屋を酒と

のむ奴婢を又とり

五日親地ある人といは比領内ノ衆人多く亦
 必極饑渴因とらふ一一年の初れ終り
 あり分よ終る美饑とらふ一農はも田民の
 中なりろれ稼穡の功小なりて身とや
 才ふ事なれ早賤とらふとくおろさく不すべ
 らは是采地となすの事と終し此を年代
 農功ふむくいりさるる又道路よ疎人多
 ら左年乃意をりし人をもと

六日沐浴

とふふ又あり又礼記よ甚と名都ふじして甚
 七是とりらるるし刃えけり又也と甚きと
 侍りの陽の秋なりまの甚けふふの先く向きの
 ときさめくふのそののたのしむるも
 ひくくわ四月七日よ甚きとみよ不
 事とくふふ又侍りあり今れつる人
 五強しふいこれりるるる侍りや

通り人日寄杜二格遠行よ

人日也宿寄草堂遙懐友人思故郷柳條子色
 石見梅花は枝堪別腸身大志遠滿各所心

猪百隻後千慮今年人日にお思明年人日知何安
 一臥東山三千春室如書劍典風塵詭途還赤二
 千石愧爾東苑南山人

○又中納言へ乃信よ正月と此よの日移よかく
 少松と引く物るりありた見んくあり

よ老日と信登へよ守り人なりきけり代の
 はあにゆきとひく

君の世と移へよそくくいとひる初まの松代
 赤松と名なりけり小松を要ありあもあやふ
 少年とゆり樹をよは甚れり先人の徳り小舟人

山崎くふ御げりあり一掃らるる業勳又尚ふ業
者お杉枝男七女二心為業飲之とゆれいもろく
すもこのふ事乃ゆりしや

八日依醫家初よ業師佛よ後進とるふ今日その
脹とつちて宴と役と又毎月八日業師佛乃
た免小素儀と念すものありこれ後唐氏れ
候よ申すいあやまりと業師佛と醫乃祖神と
志く勤るなりしり一神農とくつと醫業と教
給ふ今世よ傳り醫術を神農心承唐代名醫乃
於へたりの徳と徳ねを神農氏とく徳よ醫れ祖

神ありとるくまのまれを做殿乃徳に神聖とにやと業
らんるのほろ一醫術を素以と徳とる危故徳と
醫徳とる人なりり 神神のく一神乃世よ少彦名命
たる命醫業と志免一徳ありと一徳ありと
系 四代醫乃くめ介とこれと徳の義よたあそや
業ふろく一おわくれ醫業乃中よ一徳かを業
師佛乃徳乃えゆりとるふ業師と徳とて戸
つり八日一に素食とるハ徳よとれをた事ありと
まろくよふよとる業徳らるるの世徳のちやなりた徳
多一徳ありとる一と用てるる徳一

十一日巳日國俗は穰穰と葵念ふと芳年の廿七と
 一あり廿七と双栢と神あり廿七と月ひ一ひ双栢
 と穰とよふとのよし穰よふとつりつり廿七と廿八
 大猷院公乃沖勝志方の名は形無至辰の年より改て
 廿七と月日穰穰と神あり廿七と月日今年中廿七と
 おとこえのふりつり初より廿七と元澄き名のふりつり
 と穰老若のふりつり廿七と元初より穰穰と神あり
 事一和服乃俗行あり又母祖先乃穰穰の前
 穰と神あり和服乃俗行あり廿七と元初より穰穰と神あり
 知れぬまゝふりつり廿七と元初より穰穰と神あり

たるよりなり徳義物とすつりつりつりつりつりつりつり
 なるべし但穰と神あり事ハ古礼行て大將
 陳乃時と又穰穰と神あり初より神あり心と神
 て穰とすつりつり虎終穰とすつりつりつりつりつり
 世と穰とすつりつりつりつりつりつりつりつりつり
 て也也武田の忠と神穰穰とすつりつりつりつりつり
 月一穰穰と神あり神あり名あり武士と神穰穰と
 乃神穰と神あり年初は食物をとつりつりつりつり
 一りりありつりつりつりつりつりつりつりつりつり
 神ありつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
 神ありつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
 神ありつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり

神ありつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
 神ありつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
 神ありつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり

ありてありい志程より憊りたり至意ありて
あがら家なくあきくけりとありあられい事乃難とてあ
なそくしてあつるるあをわらひさきごとく國俗
あき世はれ風とありぬせは俗よ志くひてより
あき元風俗よ志くひてよりありありありあり
またありてい孔義よ喜るなりい風俗よりむ
へく

日本書紀卷之一終

あき

